

カン・ソニョンについて、吉岡まさみブログから引用する。

「姜さんは韓国の大学を卒業後、長崎大学で井川惺亮に指導を受け、その後、多摩美術大学の木嶋正吾教室で絵画の制作を続けた。今年の春に大学院を修了し、現在バイトをしながら制作をしている。」カンは今回四点出品した。



右が《A と B》(紙に墨、アクリル/57 x 76.5cm)、左は《Wonderland》(紙に墨、140 x 334cm) である。



《A と B》というタイトルは、異なる二つの要素が描かれていることを示している。墨で描かれたか細い世界は立体化し、アクリルによる粒子の層と侵食し合っている。

《Wonderland》にもまた粒子の層が反復するが、具体的な事物が描かれていることが特徴となる。この事物とはカンの



の心象風景であり、実際に起こった出来事では決して無い。確信に満ちた筆跡に描き足りない欲望を感じ取れる。



左は《カンカンガン》(紙にアクリル/140 x 182cm) 右が《私、森》(紙にインク、アクリル/91 x 124cm) である。



《カンカンガン》は赤い粒子の細かな色彩が変化する集積の中に、白い隙間が生じているように感じる作品だ。それはまるで、血に埋もれた骨を想起させるように有機的だ。

《私、森》もまた、アクリルの粒子と隆起する世界観が拮



抗し、結合へと向かう。インクが支持体と溶け合い、異なる色彩が生れている点に印象が残る。

カンは壮絶なテクニックを持って執拗な世界観を形成するが、それは見る者が感じることであって、カン自身が携えている訳ではない。しかし、カンに必要なのは自らを客観視する視点である。カンはまだ自分で作品を見ている。幻視者の視線を持つことにより、カンは自らの作品から離脱し、カンという自己へ回帰することが可能となる筈だ。

